OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	対話原理における構築学とは何か : 第二言語の習得と習得支援に関心を寄せながら
Author(s)	西口, 光一
Citation	大阪大学国際機構研究論集. 2026, 30, p. 39-47
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/104087
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

対話原理における構築学とは何か

―第二言語の習得と習得支援に関心を寄せながら―

西口　光一*

要　旨

出来事は、言語的思考として、「わたし」という位置において立ち現れる。そして、言語的思考は、留まるところのない意識の流れの不安定で束の間の統一体を基底としてその束ね目として浮かび上がってくる。言語的相互行為は、呼びかけ性に由来する発話の応酬を足がかりとした複数の「わたし」の間での相互的な出来事の構築である。対話原理では、「わたし」における出来事の成り立ちを構築学として説明する。そして、言語的相互行為では、発話は出来事構築の束ね目として、そして現下の「わたし」の存在として屹立する。構築学の見方は、実際に対話のゾーンが構成されて近接的な言語活動に従事してこそ学習者は社会的主体やユーザー／ラーナーとなることができて、言語の習得や発達が促進されることを示している。

【キーワード】対話原理、構築学、発話、呼びかけ、存在の出来事

1　はじめに

バフチンは人文科学の分野でロシア最大の思想家であり、20世紀最大の文学理論家だと言われている（トドロフ，2001）。バフチンの応用分野は、文学研究、歴史学、人類学、心理学をはじめとして広く人文学一般に及び、第二言語教育もその一つとなっている。筆者はこれまで、言語＝発話を中心としながらバフチンの思想に関心を寄せ、ことばのジャンル、能動的な応答的理解、創作活動（オーサリング）などに注目して第二言語教育への応用を検討し、試みてきた（西口，2013; 2015; 2020）。第二言語教育の関心からすると、バフチンの対話原理は、以下の一節に集約される。

> **言語活動（言語・発話）の真の現実とは、言語形態の抽象的な体系でもなければ、モノローグとしての発話でもありません。ましてや、モノローグ＝発話を産出する心的・生理的な作用でもありません。それは、ひとつの発話と多くの発話とによって行われる、言語による相互作用〔コミュニケーション〕という、社会的な出来事〔共起・共存〕です。**（バフチン，1980, p.208、太字強調は原著）

本稿では、これまで筆者が十分に注意を払ってこなかった構築学（architectonics）という視点を視野に入れながら、改めて対話原理について検討する。そうすることで、上の一節の中の「ひとつの発話と多くの発話とによって行われる言語による相互作用という社会的な出来事」という部分の内実が一層明らかになる。また、そうした作業により、対話原理で言う対話やその中の発話というものの特性が鮮明に浮かび上がるだろう。最後の結びでは、構築学を含む対話原理の視座が第二言語の習得と習得支援に与える示唆を論じ、同示唆とCEFR（Counsil of Europe, 2020）の行動中心のアプローチの関連について言及する。

＊　広島大学森戸国際高等教育学院　特命教授

2　対話原理の視座

2-1　対話原理の基本視線

バフチンの対話原理とは何かと問われて一言で答えるのはむずかしい。バフチンの対話原理を包括的に考究したホルクィスト（1994）は以下のように論じている。ちなみに、ホルクィストはこの一節に続いて、「バフチンの哲学」を対話原理（dialogism）と呼んでいる。

> 「バフチンの哲学」と少々ぎこちなく称されるものの正体は、プラグマティズム的傾向をもつ知識理論である。もっとくわしく言えば、人間の言語の使用方法から人間行動を把握しようとする現代の認識論のひとつである。これらの認識論の中でバフチンのそれが際だっている点は、彼が根源的なものとして提示したダイアローグ的言語概念である。（ホルクィスト，1994，p.22）

人間は行為する動物であり、言語を使用して行為したり自身の存在を示したりする動物である。また、自身を取り巻いている外界を経験するときも言語を仲立ちにする。さらには、他者と出会って交流する場合もやはり言語を重要な仲立ちとしている。そのような部分に関心を寄せてそれを徹底的に論究しているという意味で、対話原理とは、人間による言語の使用方法から人間の行動や人間の存在のあり様を捉えようとする理論的営為だとみることができる。そうした理論的営為である対話原理の際立った特徴は、ホルクィストが指摘するダイアローグ的言語概念、すなわち、すべてのことはそれ自体として存在することはなく、根源的にダイアローグ＝対話において起こると考えた点である。すべてのことが根源的にダイアローグにおいて起こるというのは、対話原理は出来事の構築学あるいは現実の構築学たろうとしていることを意味する。

本節では、ホルクィストの研究に基づいて、対話原理の核となる視線を明らかにする。

2-2　現実世界と「わたし」という存在の浮上としての内的な言語的思考

普段わたしたちは、「わたし」が存在していることを当然のこととして生きることを営んでいる。また、「わたし」の周りに現実世界が広がっていることも疑問の余地のないこととしている。「わたし」という存在も現実世界も当然のこととして受け入れているわけだ。しかし、対話原理では「わたし」という存在や現実世界の成り立ちから考究する。

「わたし」が世界においてあるいは大げさに言うと宇宙において、特定の空間と時間に位置していることは間違いない。その位置は、唯一的な「わたし」の位置であり、「わたし」以外の者はその位置を占めることはできない。対話原理はそんな位置にある「わたし」から「わたし」という存在の存立をめぐる議論を始める。

常に特定の空間と時間に位置している「わたし」には感覚器官という外界と交わる窓があって、その窓を通して「わたし」に周りの環境からの刺激が奔流のように絶えることなく流れ込んでくる[1)]。そんな位置にある「わたし」は、生きるものとして存在している限り、寄せ来るすべての刺激に反応しなければならない。その反応は刺激を無視するという形をとることもあれば、刺激を意味づけて反応する場合もある。「わたし」は、環境からの刺激に基づいて出来事や物や人を経験する場所であり、それらに応答する場所である。そして、そうした経験をしているのがまさに「わたし」である。こうした事情についてホルクィストは以下のように論じている。

> 存在を「私にあてて送られる」ものとして理解することは、私がちょうど手紙が投げ入れられる郵便受けのような、出来事が降りかかる受動的な容器であることを意味するのではない。応信性はむしろ、私が出来事であること、つまり私が通り抜けるさまざまな世界から送られる言表に絶えず応答する出来事であることを意味する。応信性の示唆していることは、意識はつねに何かについての意識であるということばかりでなく、存在自体が常に何かの存在である（でしかない）ということである。（ホルクィスト，1994，p.70）

2-3　生きることの制作の連続としての意識の流れ

生きることの営みにおいて、そうしてつくり上げられた出来事や物や人の大部分はいわば前意識でぼんやりと存在し経験されている。ただし、そのようなぼんやりとした存在や経験も決して感覚器官を通してやってくる生の刺激そのままではない。言語的

な姿は微かにしか見せない場合でも、必ず言語の支えがある。記号的な支えがないと存在は経験として存立し得ない。一方で、出来事や物や人の一部は、比較的明瞭な内的な言語的思考として意識の経験となる。ホルクィストは以下のように論じている。

> 意識と言表は、それにより、さもなくば分離したままの２つの要素── 体験の流動性と言語の物質性── をつないで不安定で束の間の統一体に束ねるための、前者（意識）は媒体（原典では medium、筆者注）後者は具体的な手段（原典では specific means、筆者注）である。言説は状況を反映するのではなく、それが状況なのである。（ホルクィスト，1994，p.92、傍点強調は原著、一部筆者改訳）

本稿で内的な言語的思考や前意識の経験と言っているところを、ホルクィストは言説（discourse）と言っている。実際のところ、前意識のぼんやりした経験も言語による支えがあって存立しているので、それも広義には言語的思考となる。かくして、「わたし」におけるすべての経験あるいは意識は言語的思考として存立することとなる。それが、「言説は状況を反映するのではなく、それが状況なのである」の趣意である。つまり、言語的思考は「わたし」における世界についての意識の経験そのものなのである。

上のホルクィストの一節には、もう一つ重要な観点が含まれている。それは、「不安定で束の間の統一体に束ねる」という部分である。いかなる言語的思考としての意識も言語としてのみで存在することはない。意識化された言語的思考は、当該の瞬間の総体としての経験の一要因として、その統一体を束ねるような形で現れる。そのような形で経験されているものの総体は、経験されている現実の「風景」[2]とその中で多かれ少なかれ注意が向けられている出来事や対象であり、それが言語的思考として浮上するのである。それが「体験の流動性と言語の物質性──をつないで〈中略〉統一体に束ねる」の趣意である。また、そうした統一体は静的なものとして留まっていることはなく、身体の動きや感覚器官の向きや焦点の変化などに伴う意識の自己制作運動として絶えることなくそれ自身を更新し続け、ダイナミックな意識の流れをなす。それが「不安定で束の間の（統一体）」の趣意である。「わたし」はそうした意識の流れを底流としてさまざまな経験をしているからこそ、言語的思考として経験された出来事や対象を現実感をもって経験することができるのである[3]。

ことばは徴表だと言われる。それは、ことばは、内言であれ外言であれ、常にこうした流れの中で形をなす不安定で束の間の統一体を基底として意識の経験として浮かび上がってくるものだからである。そして、現実世界とそれを経験する「わたし」は、ことば＝言語的思考において取扱い可能となる意識の流れの現在を現下の「わたし」として存在し続けるのである。これがわれわれの生きることの制作とそこで現れる言語的思考（内言や外言）の様態である。そのようなわれわれにおける生きることについてホルクィストは次のように述べている。

> われわれが普通生命（ライフ）と呼んでいるものは、神秘的な活力ではなく、ひとつの活動であり、私が存在の中に占める特定の場所において、私に差し向けられるさまざまな出来事との間に起こるダイアローグであり、唯一の場所からそのような出来事に対して私の示す反応の表出なのである。私が反応するのをやめ、身動きもしない（no signs of life）と ──この英語表現は正確である──、私は死んだことになる。…ダイアロジズムにおいては生命とは表出である。表出とは意味の創出を意味する。**意味は記号を媒介としてのみ生じる。**これは存在のすべてのレヴェルにおいて真実である。何かが存在するのは、それが意味する場合にかぎられる。（ホルクウィスト，1994，p.71、傍点強調は原著、太字強調は筆者）

そして、対話原理では、そうした記号の中でも、他のさまざまな記号の働きも認めつつ、言語の真の現実としてことばあるいは発話を主要な要因として注目するのである。

2-4 「他のわたし」との関係での出来事としての「わたし」

2-2と2-3で論じた見方を「わたし」と「他のわたし」との間で起こる言語的相互行為に当てはめると、そこにおいても同様のことが同様に起こることがわかる。すなわち、個々の発話やその意味やそれによって遂行される行為が最初から確定した何かと

して相手に向けられるのではない。むしろ、「わたし」から「他のわたし」つまり相手に形式も意味も確定していない音声が向けられて、それを受けた側つまり相手がそれを何らかの意味のある行為として意味づけて、同時にその脈絡を意味のあるものとして構築することで、その音声がことばとして定位されて、その人において自分に向けられた現実の行為や出来事となって、それに応答するのである。そして、そのように応答の発話を返された「わたし」は、同じように意味づけや構築の作業をしてまた応答を返すのである。

こうした発話の応酬と、それを足がかりとして相互的に現実や出来事を構築して承認してそれを経験することが言語的相互行為の現実である。

3　対話性

3-1　対話原理における対話

本節では、バフチンの論述をたどりながら、対話原理における対話を改めて明らかにしたい。

一般に対話と言えば、主に二者間で言葉を交わして話すことと見られる。しかし、これでは会話と同じになってしまう。そこでもう一歩進めて、例えば「AI研究者と哲学者との人間をめぐる対話」のように根本的な立場が異なると思われる者の間で行われる、違いを摺り合わせることによってテーマについてより高次の理解を追求しようとすることこそが対話であるという見方が出てくる[4)]。本稿ではそうした対話を、対話原理における対話と対比して、一般的な対話と呼ぶ。

では、バフチンは対話についてどのように言っているか見てみよう。

> 言葉、しかも分かち難く対話的接触と結びついている言葉は、その本質において、相手がその声を聞き、それに答えてくれることを望んでいる。その対話的な本質ゆえに、言葉は最終的な対話的な審級（インスタンス）をも予想している。言葉を受けとる、ということは相手が声を聞く、ということである。**相手が不在**の決定は容認できない。私の言葉は、継続される対話――そこで私の言葉は聞かれ、答えが返され、新しく意味づけられる――の中に残る。（バフチン，1988，p.276、太字強調は原著）

この一節を漫然と読んでいると、バフチンも対話を一般的な対話と同じように考えているようにも見える。しかし、よく見ると、「分かち難く対話的接触と結びついている言葉」、「その対話的な本質ゆえに、言葉は最終的な対話的な審級（インスタンス）をも予想している」、「**相手が不在**の決定は容認できない」、「私の言葉は継続される対話…の中に残る」などと意味深げに表現されている。一般的な対話は、上述のように、「根本的な立場が異なる」や「より高次の理解を追求」などの特徴を含意しているとはいえ、やはり主に複数の人の間で行われる言葉を交わす意思疎通の活動のことを言っている。それに対し、バフチンの言う対話はそもそもの関心が異なる。もう一つバフチンの一節を見てみよう。

> 意識の対話的本質。人間の生そのものの対話的本質。真の人間的生を**言語的に表現するなら**、それにふさわしい唯一の形式は、**完結することのない対話**である。生はその本質において対話的なものである。（バフチン，1988，p.262、太字強調は原著）

この一節で、バフチンは、意識は本質的に対話的である、人が人として生きることは本質的に対話的である、人として生きることの真の姿を表現するならそれは完結することのない対話だ、生きることは本質的に対話的だ、との見解を述べている。上に続く一節は以下の通りである。

> 生きるとは即ち対話に参加すること――尋ね、耳を傾け、答え、同意したりすることである。この対話に人間は全身と生命活動のすべて――目、唇、手、魂、精神、身体のすべて、様々な行為――によって参加している。人は、自己のすべてを言葉の中にこめ、この言葉は対話的に織りなされた人間の生の中へ、世界の饗宴（シンポジウム）の中へ入っていく。（バフチン，1988，p.262）

この一節では、人は「尋ね、耳を傾け、答え、同意したり」というふうに言語を仲立ちとするだけでなく、「全身と生命活動のすべて――目、唇、手、魂、精神、身体のすべて、様々な行為――によって」対話に参加しているとバフチンは言う。しかし、最後の一文では、そうした言語以外の要因が対話に参画

しつつも「自己のすべてを言葉の中にこめ、この言葉は対話的に織りなされた人間の生の中へ、世界の饗宴の中へ入っていく」と言って、やはり諸要因の中でも言語が枢要な要因であると論じている。

ここに言う「言葉」は、言うまでもなく発話である。人が人として生きることの対話性に包囲された発話である。そうした発話は、人として生きている「わたし」から、同じく人として生きている「他のわたし」に向けて発せられる呼びかけである。そして、それは呼びかけなので、当然相手からの応答つまり「わたし」に向けた新たな呼びかけが来ることを予期している。発話を向けて呼びかけられた「他のわたし」はそれがどのような呼びかけであるかを「測量」して、人として生きている者として応答の発話を返す。そして、その応答の発話はまた新たな呼びかけとなって、新たな応答を要請する。発話のやり取りというのは、呼びかけの応酬である。そして、そうした呼びかけの応酬によって、共同的な出来事や現実が協働的に構成されて、それに参画した者はその当事者として現実的に特定の様態で存在することになる。

このように対話原理における対話は、現実を構成する営みそのもの、それを通して各々の「わたし」が「わたし」という存在となる営みそのもののことである。それは、人を人として成り立たせ、維持してくれる根源的な営みなのである。

バフチンの対話原理を特徴づけるキーワードの一つに「宛名性」がある。英語では、“addressivity”である。しかし、「宛名性」ではどうも判然としない。本稿では、英語の“address”からヒントを得て、“address”することを呼びかけと考えた。そうすると、あらゆる発話はその本性において呼びかけ性を備えていることとなる。そのように考えることで、上で論じたように、バフチンの言う対話やそこで交わされる発話の性質が鮮やかに浮かび上がってくる。

3-2　言語活動従事の現実

「わたし」という存在は、自身の来し方から将来も視野に入れながら現在において生きることを営んでいる。言語的相互行為は、そんな「わたし」と同じような「他のわたし」が出会ったときに行われる。

「わたし」と「他のわたし」は各々特定の現実世界の時空間の経路を経てその出会いの瞬間に至る。そして、互いを認め合った瞬間に、「わたし」と「他のわたし」が共に受け容れる特定の相互的な時空間を共有する。そうした状況から発話と応答のやり取りが始まる。

仮に「わたし」のほうから発話を始めるとして、「わたし」においてまず「わたし」と相手との交わりに関する諸要因を背景として相手に向けた存在の姿勢が生じる。それはまだ前意識の段階にあると言っていいだろう。やがて、その姿勢はそれ自身をより具体化して束ねてくれる慣習的な形式を求める。それを得たときに発話が立ち現れる。そして、「わたし」は相手に「呼びかけ」る。

すでに「わたし」との相互的な活動に入っている「他のわたし」は、共有した相互的な時空間を背景として、「わたし」の表情や身振りなども関連要因としながら自身に向けられた「わたし」からの呼びかけを意味づけて、現下の相互的な活動を構成する特定の行為として定位する。そして、そうした意味づけや定位と並行して、出来事としての「わたし」に対する応答の姿勢を生じさせ、それを具体化し束ねてくれる慣習的な形式を見出す。そのようにして応答の発話を得た「他のわたし」は相手に返答をする。このようにして「わたし」と「他のわたし」は互いに辞去するまで呼びかけの取り交わしを続けて言語活動に従事するのである。

バフチンの言う能動的な応答的理解も、対話をこのような呼びかけの交わし合いとみる視点に包摂される。つまり、能動的な応答的理解は、相手からの呼びかけに対して呼びかけ返そうという姿勢での理解なのである。

4．構築学

4-1　対話における発話と構築学

対話原理における対話で発話は際立って重要な位置を占める。すなわち、発話は対話の営みの中枢にあって、意味づけと現実構成の足がかりとなる。それは、額面通りの意味を示す語の構成体という実体的な手がかりではなく、あくまでこれから現実を構成していくためのきっかけ、足がかりである。そして、重要な点は、その足がかりは、「わたし」と「他のわたし」の両者が共有する共通の領域として、話し手と聞き手の間に「音声の橋」のように架け渡されていることだ。そうした点についてバフチンは以下のように論じている。

発話は、それ自体が**話し手と聞き手との相互関係から生まれた所産**なのです。いずれの発話も、「他者」との関係の中にある「人間」を表しております。発話の中で、“私”は、他人の視点から、さらに、最終的には“私”の属する共同体の視点から、自らを形づくります。発話・言葉は、“私”と他の人たちとの間に架けられた橋です。この橋は、一方の端では“私”によって支えられ、他方の端では“私”の聞き手によって支えられております。発話・言葉は、話し手と聞き手とが共有する共通の領域です。（バフチン，1980，p.188、太字強調は原著）

言語活動で行われていることは、単なる言葉の交換とその意味や働きかけなどの交換ではない。発話は、話し手においては、相手に向けた特定の存在の姿勢が一つのマトリクスとして制作されてその束ね目として立ち現れたものである。一方の聞き手においては、自身に向けられたその音声的な現れを意味づけようとし、やはり一つのマトリクスとして出来事を制作し、向けられた音声を出来事の束ね目として定位して、そして応答を返す。その作業は、話し手においても聞き手においても、あらかじめ決まっているものは何もない、発話を束ね目とした意味のある現実という統一体を絶えることなく制作あるいは組織化する作業となる。そして、「橋」としての発話が相互にとって取扱い可能で顕在する要因として順次に屹立するのである。

バフチンは、言語活動に従事するときにわたしたちが行うこうした作業を構築学（architechtonics）と呼んでいる（バフチン，1999，pp.83-84）。対話における構築学は、輻輳するさまざまな要因を現実という意味の景観として一つの体制あるいは統一体に組織化する運動である。発話は、そうした組織化が完成するとともに、その束ね目として画定されるのである[5)]。

4-2　構築学と存在の出来事

生物学者ユクスキュルは、環世界という視点を提示している（ユクスキュル／クリサート，2005）。その視点は、生物はそれぞれの種毎に具有する感覚器官や身体の能力に応じて環境から独自の要因を抽出して種に固有の世界である環世界を制作してその環世界に生きているということである。人間の場合にも環世界の視点は当てはまるわけだが、人間の場合は特殊で、生きることの重要な部分として、言語を仲立ちとして文化的な現実世界を構築してそれを経験する当事者となったり、やはり言語を仲立ちとして他者と共に相互的な現実を構築して各々がその当事者となったりするという生きることの営み方をしている。後者の他者との相互的な現実構築についてさらに論じると、複数の社会文化的な自己制作が同時並行的で相互了承的に起こって、言語活動という一つの相互的で共同的な現実が構築されて、各々がその当事者となっているとみることができる。そして、そこにおいて、発話という呼びかけの取り交わしが相互的で共同的な現実構築のための枢要な要因となっているのである。「はじめに」での引用部内の「それ（言語活動の真の現実）は、ひとつの発話と多くの発話とによって行われる言語による相互作用という社会的な出来事です」というのはそうした事情を端的に表現したものである。

この「社会的な出来事」については邦訳では後ろに「共起・共存」との訳者注が付されている。この部分はロシア語の原典では “sobytie” である。“sobytie” は、英語でパラレルに訳すと、“co-being” となる。ホルクィストも指摘しているように、バフチンは初期の著作（バフチン，1999）で “sobytie bytija” という表現を執拗に使っている（ホルクィスト，1994，pp.36-37）。“bytija” は英語の “being” に対応し、“sobytie bytija” は邦訳では「存在の出来事」と訳されている。「共起・共存」との訳者注はそうした事情を反映したものと推察される。バフチンは、「わたし」と「他のわたし」との間での相互の呼びかけ及びその背後での相互的な現実世界の組織化、つまり構築学があってこそ、「わたし」と「他のわたし」の間で「存在の出来事」も成り立ち、相互も当事者として存立できると考えているのである。

5　結び ── 第二言語の習得と習得支援への関心から

新たな言語を身につけること、つまり第二言語の習得とは何かと言えば、本稿での議論に照らし合わせて言うと、対話の状況下で時々刻々に結ばれる意識の経験の総体を発話として徴表的に束ねるということを新たな言語で自在に行うことができるようになることである。対話の状況下で浮上した自身の言

語での発話を第二言語に置き換えて発出したり、同じく対話の状況下で自身に向けられた第二言語での発話を自身の言語に置き換えて理解したりできるようになることとは見ない。しかし、第二言語習得途上の言語ユーザーによる言語活動従事においては、自身の言語の語として意識に浮上したものを第二言語の語に置き換えて発話に編入したり、自身に向けられた発話に自身の言語の言葉で注釈を添えたり、発話全体を自身の言語に置き換えたりしながら言語活動に従事するほかない状況はしばしば起こる。これらの状況では、対話という営みの最表面で言語間的な処理をバイパスとして実行することで、直面する言語活動従事の課題に方略的に対応しているのである。

こうした認識の上で言語の習得や発達を促進するために考え得る方策は、言語間的処理が最少で済むような対話状況を設定し、そこで学習者が言語活動に従事することだろう。そうした近接的な言語活動（西口, 2025, pp.160–161）に従事することによって、未習熟の言語的要因を言語活動従事の脈絡で経験したり補ったりしながら現下の対話の姿勢を発話として束ねることを経験することができるだろう[6)]。そして、特定の対話状況でそうした経験を豊富にすることでこそ、時々刻々に結ばれる意識の経験を発話として束ねる言語技量（language capacity, Widdowson, 1984）を育成することが可能になるだろう。

また、そのような経験を保障するためには、そこまでで育成された言語技量に基づいて近接的に言語活動に従事できる具体的な対話のゾーンを構成しなければならない。そして、授業において対話のゾーンを構成するためには、新たな言語の漸進的な習得や発達を見通した言語教育を企画しなければならない。

一方、こうした習得支援をめぐる観点は、学習者を社会的主体（social agent）と見、ユーザー / ラーナー（user/learner）と位置づける CEFR の行動中心のアプローチの立場と通底する。すなわち、行動中心のアプローチで言う社会的主体というのは、現実社会にあるさまざまな実用的なコミュニケーション課題を達成できるようになるというような視点ではなく、むしろ他の社会的主体と共に現下の相互行為に従事し、出来事や現実を協働的に構築する主体を名指しているのである。そして、ユーザー / ラーナーの視点は、第二言語習得途上者を言語活動に従事しつつ言語の習得や発達を促進する者として位置づけているのである[7)]。

本稿で論じた構築学を含む対話原理の視座は、ただ言語活動のために課題状況を設定すればそれで学習者が社会的主体やユーザー / ラーナーとなって言語の習得や発達が促進できるのではなく、実際に対話のゾーンが構成されて学習者が近接的な言語活動に当事者として従事してこそ学習者は社会的主体やユーザー / ラーナーとなることができて、言語の習得や発達が促進されることを示している。

注

1） 実際には、体性感覚（皮膚感覚と筋肉や関節などの感覚）と内臓感覚（空腹感や渇きや胃の痛みなどの内臓から得られる感覚）も議論に含めなければならないが、煩雑になるので本稿ではそうした側面の議論は割愛した。

2） ここに言う「風景」は「現実感のある風景」であり、それには物の遠近感や物の内部空間の経験から、流れる風の心地良さや空気のすがすがしさなども含まれる。伊藤（2013）は、生きられた世界としてそうした「風景」について論じている。

3） 出来事と意味についてはさらに議論が必要であり、ドゥルーズ（2007）や佐藤・長橋（2019）などが手がかりを与えているが、本稿では紙幅の関係でそうした議論は割愛する。

4） 例えば、平田（2012）は会話と対話をそのように区別している。

5） そうした統一体あるいは構築物の内実を、例えば、Jacoby and Ochs（1995）は「形式、解釈、スタンス、行為、活動、アイデンティティ、社会制度、技能、イデオロギー、情意、その他の文化的に意味のある現実」と説明している。

6）「近接的」というのは、ヴィゴツキーの発達の最近接領域から発想を得ているが、ヴィゴツキーが関心を寄せている認知や人格の発達の場合と、第二言語の習得や上達の場合では、事情が異なる。そうした点については、西口（2015）の p.146 の注 9 で論じている。

7） こうした視点は、言語の学習と言語の行使の社会的性質（原文は social nature of language learning and language use で、Council of Europe（2020）の p.30、邦訳では p.10）から敷衍したものである。西口（2025）の pp,92–94 で詳しく論じている。

参考文献

邦文

伊藤泰雄（2013）『哲学入門 ── 身体・表現・世界　第 3 版』Gakken

ヴィゴツキー, L. S.（2001）『思考と言語』、柴田義松

訳、新読書社
ヴィゴツキー，L. S.（2003）『「発達の最近接領域」の理論』、土井捷三・神谷栄司訳、三学出版
佐藤公治・長橋聡（2019）『ヴィゴツキーからドゥルーズを読む ── 人間精神の生成論』新曜社
ドゥルーズ，J.（2007）『意味の論理学』小泉義之訳、河出書房新社
トドロフ，T.（2001）『ミハイル・バフチン 対話原理』大谷尚文訳、法政大学出版局
西口光一（2013）『第二言語教育におけるバフチン的視点 ── 第二言語教育学の基盤として』くろしお出版
西口光一（2015）『対話原理と第二言語の習得と教育 ── 第二言語教育におけるバフチン的アプローチ』くろしお出版
西口光一（2020）『新次元の日本語教育の理論と企画と実践 ── 第二言語教育学と表現活動中心のアプローチ』くろしお出版
西口光一（2022）『メルロ＝ポンティの言語論のエッセンス ── メルロ＝ポンティとオートポイエーシスと対話原理』福村出版
西口光一（2025）『日本語の習得と習得支援を考える ── 真にプロフェッショナルな日本語教育の創造をめざして』くろしお出版
バフチン，M. M.（1980）『言語と文化の記号論 ── マルクス主義と言語の哲学 ──』北岡誠司訳、新時代社
バフチン，M, M.（1988）「ドストエフスキー論の改稿プランによせて」伊東一郎訳、『ことば　対話　テキスト』バフチン M. M.（1988）新谷敬三郎他訳 新時代社
ミハイル，M. M.（1999）「行為の哲学によせて」佐々木寛訳、『ミハイル・バフチン全著作』第１巻、バフチン，M. M.（1999）伊東一郎・佐々木寛訳 水声社
平田オリザ（2012）『わかりあえないことから ── コミュニケーション能力とは何か』講談社
ホルクィスト，M.（1994）『ダイアローグの思想』伊藤誓訳、法政大学出版局
ユクスキュル／クリサート（2005）『生物から見た世界』、日高敏隆・羽田節子訳、岩波書店　※クリサートは挿絵の責任者なので、著作としてはユクスキュル著となる。

英文

Council of Europe（2020）*Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment: Companion Volume*. Cambridge: Cambridge University Press. 吉島茂他訳（2023）『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠：随伴版』吉島茂他訳（2023）ゲーテインスティテュート、https://www.goethe.de/resources/files/pdf191/cefr31.pdf、2026年1月20日閲覧。

Jacoby, S. and Ochs, E.（1995）Co-construction: an introduction. *Research on Language and Social Interaction* 28: 171–183.

Widdowson, H. G.（1984）*Explorations in Applied Linguistics 2*. Oxford: Oxford University Press.

Abstract

Architechtonics in Dialogism

— Towards the Interest of Second Language Acquisition and its Facilitation —

NISHIGUCHI, Koichi

Events arise to the locus of “me” in the form of verbal thinking. Verbal thinking appears as a knot that bundles unstable and temporary unity of ceaseless stream of consciousness. Verbal interaction is mutual architectonics by “me”s which operates through continual exchange of utterances that originate from addressivity. Thus, constitution of events is explained as a process of architectonics in “me” (s). And utterances appear saliently as knots of architectonics of events. This view suggests that language learners can stand as social agents or user/learners just by engaging in proximal language activities within actual zones of dialogue and that language acquisition and development is promoted through these engagements.